

第8回奈良 ESD 連続セミナー

大西 浩明

◇日時：2025 年 11 月 4 日（火）19 時～21 時

◇方法：Zoom によるオンライン形式

◇参加者：38 名

◇内容：学習指導案の相互検討①

【ルーム 1】 ファシリテーター：阪本さゆり（奈良保育学院）、長谷川かおり（奈良教育大学）

1)木戸香里先生(草津市立老上こども園) 5歳児 「ポップコーンパーティーをしよう」

12 月に実施予定 収穫したトウモロコシを現在乾燥中

栽培・収穫を通して、喜びを感じるとともに、いろんな食べ方があること、他にも利用できるものがあることにも気付かせたい 「多様性」

給食の残菜を肥料に活用して栽培してきた 土の再生活動 「自然環境・生態系保全の重視」

ポップコーンを調理しているときも、はじける様子を子どもに見せたい

意見交流から

- ・「ESD との関連」については、あまり欲張らない方がいいと思う。
- ・世界各地でトウモロコシが主食になっていることを知ることや、同じトウモロコシでも様々な種類のものがあることに気付かせたい。→ 興味・関心をもつ程度で。
- ・トウモロコシの葉やひげはコンポストに入れられるが、芯は自然になかなか還らない。
→ 遊びに使ってもいいのでは。葉っぱやひげも使える。

2)中川珠紀先生(草津市立玉川こども園)

5歳児「萩染めで『世界で一つだけの T シャツづくり』をしよう」

子どもにとっても、地域の人にとっても萩は身近で大切にされている 親子での活動

つくった T シャツを地域の人にプレゼント 「萩まつり」実行委員の方に

地域の人でも萩染めができることを知らない人が多い 地域の自然と文化の価値への気づき

自分たちで作ったものを自分で着ることの喜び（世界にこれしかない）

地域の人とのつながりがより強まった印象がある

意見交流から

- ・「つながりを尊重する態度」を中心に実践されたことがよく分かる。
- ・自然由来のものが染料になるという点から言えば、批判的思考力も入れられると思う。
- ・地域の素材を取り上げた充実した実践は、様々な資質・能力を育むことができる。

【ルーム 2】 ファシリテーター：河野晋也（奈良教育大学）

1)西田有彦先生(生駒市立俵口小学校)

小学校6年 総合的な学習の時間「飛行塔の96年」

生駒山上遊園地に 100 年近く残っている飛行塔を題材とした平和学習の授業。現在「この飛行塔を残していくためにはどんな意味があるだろうか」という問いで考えているが、より良い問いがあるのではないかという悩みをもって本日のセミナーに参加した。

どんな平和のシンボルであったとしても、戦争のために使われてしまうということに気づくことができる教材であり、ESD 教材としての価値は高いと思われる。参加者からは、この飛行塔を作成した方の願いに目を向けて探究させることがよい、当時の時代背景をつかめるものを取り入れることもよい、などの助言が出された。

2) 竹田光陽先生(生駒市立生駒東小学校)

小学校5年 総合的な学習の時間「命の尊さを考え、人と生き物が生きる道を考えよう」

私達が気づかないうちに生き物の命について、軽重をつけて扱ってしまっていることを考えさせる授業。自分たちが当たり前に行っていることについて、立ち止まって考えさせ、揺さぶるような工夫が多くなされている。ただ、生き物の命をすべて尊重すると、生態系が成り立たないこともある。また命のつながりのネットワークについて子どもたちがどの程度イメージできるか、また子どもたちにとって考えやすい問いか、という点について、さらに工夫が必要だと考えられる。

【ルーム3】 ファシリテーター：中澤静男（奈良教育大学）

1) 栗谷正樹先生(大阪市立今川小学校)

小学校3年 総合的な学習の時間「クビアカツヤカミキリを題材にした生態系学習」

クビアカツヤカミキリについて 外来生物 サクラやモモ、ウメなどの食害被害

特にサクラの被害が拡大している。→ セミやミツバチの減少にも影響していると考えられる

2015 年頃に輸入した貨物や外材などに付いていたのではないかな？

その裏には、安さや便利さなど、現在の自分さえよければいいという人の営みがあるのではないかな
被害状況の確認：川沿いの公園で生き物探し → (気づき) 多くのサクラの木が枯れ始めている。

専門家の講義を聞く「外来種や生物多様性について」

→ 公園の木の中でクビアカツヤカミキリの幼虫の入っている木を見つけよう

木の根元にフラス(木の粉)

カミキリムシなどは幹に穴をあけて産卵し、その後、食害しながら成長する。食害した時に排出されたもの

「サクラや生き物を守るために自分ができることは何だろうか？」

大阪市の「わがまちナイススポット(都市景観資源)」の取組への協力

「カミツキガメは悪者か」松澤陽士・小学3年生国語科教材

意見交流から

- ・地域教材を開発する際の着眼点がすばらしい
- ・駆除と命の大切さとのあつれき 道徳教材になる
- ・サクラで終わらせるのではなく、命の大切さについて考える機会にした方がいい
- ・「外来種は本当に悪者かな？」 答えは出ないが、対話をすることで考えが深まる

2) 菊池甲餘子先生(姫路市立水上小学校)

特別支援学級自立活動「かけがえのないいのちと共に生きよう」

生まれてきたことを喜んでもらっていたことを知る

命との向き合い方を考える — 宮城幸貴奈さんの詩「命」

養護教諭との連携

絵本作家である保護者の協力

子どもたちに考えてもらいたかったこと

- ・命との向き合い方 精一杯生きることの大切さ
- ・生きる権利と自分を守ることの大切さ
- ・成長するにともなって増えていく「命のつながり」
- ・他者の命も大切にすることの広がり

友達を大切にすることは具体的にどのようにすること？

意見交流から

- ・外部人材との連携では、目的の共有化がとても大切。アプローチは多様であってもいいが、目的は明確に持っていく。
- ・自傷行為やパニックのある児童－自分も他者も大切にできない実態
← 大切に思われていること、思われていたことに気づかせたい
- ・命の大切さを安全教育につなげる。
- ・命の大切さをアートで表現するのはとてもいい。
- ・「一人一人の生きる力を感じよう」

感性のダイレクト表現であり、誰にでもできる（文章は苦手な児童もいる）

3)三笠日向先生(大阪市立歌島小学校) 小学校1年 道徳「新ももたろう物語」

鬼のイメージについて話し合う → いろいろな鬼がいる

ももたろうの鬼退治 暴力的解決でいいのか声掛けするほうがいいのか

- ・ももたろうはオニにあったことがない→人から聞いただけ、確かめていない
- ・急にももたろうたちにやってこられて鬼たちはどう思ったのだろう？
- ・オニの子どもはどうなった？ももたろうたちのことをどう思った？
- ・ももたろうの方がオニかもしれない。

鬼がいつもおこっているのはなぜだろう？

食べ物がないから？嫌われているから？「個別な事情がある」ことを想像する

本当にいつもおこっているのか？ そのように描く理由は何かな？

→ 対話の大切さ、知ろうとすることが大事

新ももたろうをつくろう 鬼退治の場面はどうしたらいいのか

意見交流から

- ・誰もが知っている話 当たり前に思っていたことを問い直すことで批判的な見方が育つ
- ・オニ＝怖がられる存在 その原因を知ることが大切
- ・身の回りの怖がられる存在。
ヘビ：見た目 マムシ以外は安全 近づかなければ何もしない
幽霊：見た目 そのように描かれている理由を考える
- ・新ももたろうの劇は、保護者にも新鮮。ぜひ、保護者からのお手紙をもらおう。

【ルーム4】 ファシリテーター：中村友弥（奈良市立朱雀小学校）

1)原田龍ノ介先生(奈良市立朱雀小学校)

小学校5年 総合的な学習の時間「3000年もつづいている日本のお米を守りたい」

単元の段階

内容

- みつめる 米作りの仕組み、流通、自然条件、農家の働き方などを学ぶ。
- しらべる 水の管理における手作業の負担、米作りの仕事の工夫、米が消費者に届くまでの過程について探求する。米作りの課題や工夫について米農家に話を聞き、米作りの歴史、スマート農業の工夫（特に水管理）や農家を支える人々について深掘りする。
- ふかめる
- ひろげる 米作りや農家の方々に対し、私たちにできることを考察し、実行に移す。

意見交流から

- ・ESD の視点である世代間の公平性を考慮するため、米作りの歴史を深く学ぶことで、未来の米作りについて考える揺さぶりにつながるのではないか。
- ・「米をなぜ守る必要があるのか」という問いを立てることで、米が日本人にとっての文化的・経済的な価値（日本酒、醤油、味噌などの食文化の維持）を具体的に考える機会になる。
- ・単元を通して、手作業での水の管理の大変さから、最終的にスマート農業の工夫へと繋がる構成は、技術による課題解決の流れが明確に示されており、論理的な繋がりを感じた。
- ・子どもたちが米作りの大変さを実感することで、「お米を大切に食べたい」という消費者意識の変容に結びつくことが期待できる。

2)吉岡真志先生(奈良学園小学校)

小学校6年 理科「電気の利用～電気をつくり、ためて、つかって」

単元の段階

内容

- みつめる 「どうして電気は使えるのだろうか？」という問いから、手回し発電機を用いた導入・体験を行う。
- しらべる LED と豆電球を用いた比較実験を通して、同じ条件でどの程度の明るさが得られるかを比較する。LED が良い、豆電球が悪いという一元的な価値判断に留まらない視点を持つ。
電気エネルギーが熱、光、運動の形で使われる様相を整理し、効率的な使い方について考察する。「省エネは我慢ではなく、工夫でできる」という前向きな意識を持たせる。
- ふかめる 発電所の種類について理解し、タービンを回すという基本原理を「みつめる」の段階に戻って再確認する。
- ひろげる 児童が自由に「電気を作る・ためる」方法を考え、創作する。

意見交流から

- ・手回し発電機（みつめる）からタービン（ふかめる）を経て、児童の自由な発想による創作（ひろげる）へと繋がる構成は、電気エネルギーの仕組みと未来への応用が一貫して関連付けられており、論理的な単元展開である。
- ・豆電球と LED の比較において、単純な優劣で判断しないという多角的な視点を持たせようとする姿勢が優れている。
- ・エネルギー供給を受けている側に位置する奈良に住む子どもたちが、この学習を通してどのような新しい発想や解決策に辿り着くのか、そのアウトプットが非常に楽しみである。

3)堀口大地先生(奈良学園小学校)

小学校3年 総合的な学習の時間「琵琶湖とわたしたちの暮らし～水の大切さを考えよう～」

単元の段階	内容
みつめる	琵琶湖での体験学習、カヌー体験。
しらべる	琵琶湖での宿泊学習。
ふかめる	水について調べたいことをクラスで決め、子どもたち自身が課題設定を行い、調べる活動を深める。
ひろげる	新聞にまとめる。

意見交流から

- ・琵琶湖での宿泊学習という具体的な体験を、どのように「水を大切にする」という内面的な学びに昇華させるかが重要である。宿泊学習を単なる体験ではなく、問題提起の場として位置づける工夫が求められる。
- ・児童の居住地域が多様である奈良学園において、「琵琶湖と私たちの生活」というテーマを扱うことは、地域（水系）との繋がりが薄い生徒にとって、広域的な水の循環や環境問題を考える上での良いモデルとなる可能性を秘めている。
- ・子どもたちが水に対する疑問（課題）を自ら決めて調べるというプロセスは、主体的・探究的な学びを促す上で非常に価値がある。

【ルーム5】 ファシリテーター：新宮済（奈良女子高等学校）

1)井上岳海先生(奈良女子高等学校)

高校 総合的な探究の時間 「万博の学びを通した奈良らしい共生社会」

万博の目的にふれながら、現地見学し大阪関西万博のメッセージを体感する。

歴史教科で過去の万博の目的を探究し、次のリヤド万博でのキーワードの「共生」について考察していく。

意見交流から

- ・教科で万博を調べて、探究で行動化に向けた体験をさせていくという方法がよい
- ・「共生」についてダイワハウスを出したがどのように学んでいくの？
- ・「共生」をどう落とし込むか？
- ・「共生」の考え方の変化を追っていく。
- ・万博マイナス発言が多かった。終わってみると希望がみんなに生まれている。
「共生」感情や希望

2)村上雄太先生(奈良市立平城小学校)

小学校4年 総合的な学習の時間「広めよう！地域の文化・日本の文化」

文化勲章に地域の画家上村氏の鳥園を探検

松柏美術館から日本画を学ぶ

日本画を描く

錦光園でニカワを学ぶ

上村さんはどうして平城の地を選んだのか

意見交流から

- ・上村さんを通して、文化を学び地域の良さを考える考え方が素晴らしい。
- ・カリマネの表がみやすい。ニカワのつながりを体験でつなげてくれたらよい。
- ・学びが次につながるような、地域を考える機会をつくりたい。

3)佐藤亨樹先生(山形市立大曾根小学校) 小学校5年 社会科「米づくり」

備蓄米と新米の食べ比べから「なぜ備蓄米は必要なのか？」という学習問題から食料生産について考え、これからの日本の農業や地域の農業について考える。農業の多面的機能を守ることによって農業についてみんなで考える。備蓄米がおいしかった予想外の反応があった。

意見交流から

- ・農業が自分の生活と関係しているよね。農業の多面的機能で落とし込むのがよい。
- ・身近に食料生産が感じ取れる展開を増やせるかもしれない。
- ・GT との対話を増やして、GT の願いに気づけたらいいと思う。

【ルーム 6】 ファシリテーター：圓山裕史（奈良市立伏見小学校）

1)谷口晋吾先生(草津市立老上中学校)

中学校1年 総合的な学習の時間 「安心してすごせる社会をつくるために～障害者理解を中心に～」
誰もが安心して暮らせる社会をつくっていくためには何が必要か考える
障がいフォーカスをあて、ユニバーサルデザインの提案をする
登下校の中で、自分たちのまちの課題を見つけるようにする

意見交流から

- ・「ひろげる」段階で、中学生として何かしら行動化につなげていきたい。自分たちで考えたことを市に提案するなど。
- ・本当に困り感がないと、自分事として考えていけない。
- ・人権教育は普段からの教師の語りなども必要になってくる。
- ・人権教育は最後に自分にかえすような展開を大事にしてほしい。
- ・小学校からどんな学習をしてきているかを確認するのもいい。
→保育園で障がい者体験、車いす体験をしている。小学校でも部落問題学習をしている。
- ・同じ障害を持った人でもニーズが違う場合がある。
- ・クラスメイトにインタビューする。
- ・部落問題にしろ、障がい者理解にしろ、根底の部分は同じではないか。それを生徒が言語化できればよくなるのではないだろうか。

2)辻大吾先生(草津市立老上中学校) 中学校1年 総合的な学習の時間

「老上中学区防災プロジェクト ～みんなで創る安全・安心なまち OIKAMI～」

南海トラフ巨大地震が起こった場合のことを想定して、災害が自分たちの生活とどのように関わるのかを考える

防災バックの中に入れるものは何か考える

地域の防災の課題は何か考える。空き家が多いことが課題。新興住宅も多く町の中で二極化している

意見交流から

- ・防災の学習は、優先順位が大事。何を大切にするかを考えさせる。(ダイヤモンドランキングといった思考ツールが使えるかも)
- ・中学生の役割とは、どんなことが考えられるか。地元にて一番動ける中学生がどんなことができるのか、どんなことを期待しているのか知りたい。
- ・学んだことを近隣の小学校に伝えに、出前授業をするなんかもいいかも。
- ・理想は、ゲストは子どもが聞きたいタイミングで出会わせるといいかも。
- ・ゲストから聞くだけだと、受け身になりやすいので注意したい。
- ・避難所設営から見えてくることはたくさんある。
- ・防災教育では、いかにクリティカルシンキングを働かせることができるかが大切。「想定外を想定外にしない」ことが大事であることに気付けたらもっといい。
- ・階上中学校の児童のスピーチ（「天を恨まず」）を紹介するのも効果がある。

3)山本寛之先生(草津市教育委員会)

中学校1年 総合的な学習の時間「つなげよう！ 3(スリー)Lのバトン」(松原中学校で実践)

3L 命のつながり

琵琶湖の学習を通して、様々なつながりについて気付いたり考えたりする

水草堆肥について深く調べる。実物を用意している

水草堆肥を使った畑で効果がでればいい

水草を堆肥にしたり、取り除いたりする活動がなぜ行われているのか考えたい

松原ファームを中心にどの学年も3Lについて考えている

3Lを通して郷土愛を育んでほしいことが目的

意見交流から

- ・地域の野菜、ベジグサなど、地域のものに視点を向けることでより地域愛を育みたい。
- ・これからの学習は、子どもたちの発想で広がっていけばいい。
- ・水草堆肥を使い続ける値打ちは何か生徒たちに考えてほしい。